

現代日本語における畳語について

—数概念からみた畳語—

田村 泰男

0. はじめに

言語の機能は、基本的には、音声という媒介を通していろいろな意味を表現することにある。当然ながら、ある意味を表現するための形式は発話の中で他の意味を表現する形式と異なる必要がある。この意味の違いを表すために、音声レベルでは次の二つの方法が用いられる。すなわち、質的な違い (qualitative differences) を用いる方法と量的な違い (quantitative differences) を用いる方法である。Moravcsik (1978) ^(#1)によれば、質的な違いとは、音特性 (sound properties) の違い (eg. pa/ba) や音特性の時間的な関係 (eg. pa/ap) に基づくものであり、量的な違いとは、音特性を生産したり知覚する時間 (eg. ab/abb) に関わるものであるという。このうち後者の量的な違いによって意味の違いを表す形式の中に本稿で扱おうとしている畳語がある。

畳語は、合成語のうち同じ形態素や語基や語を重ねて一語としたもので、〈名詞〉〈動詞〉〈形容詞〉〈副詞〉のいずれにも多く見られる言語現象である。合成語における畳語の位置づけについては、玉村 (1988) ^(#2)に次のような分類表がある。

合成語	複合語	純複合語	並列複合語 (やまかわ・尾ひれ)
			統語複合語 (やまがわ・尾びれ)
		準複合語 (きのこ・食わず嫌い・お気に入り)	
	派生語 (おしろい・春めく・美しさ)		
畳語 (山々・泣く泣く・ひそひそ)			

狭義では、「人々」「泣く泣く」のような同じ単語の反復形 (或いは重複形) のみを指して、畳語と呼ぶ場合もあるようであるが、本稿では「軽々」「軽々しい」「軽々と」のような部分的反復語 (語幹要素の一部または全部を重複するもので重綴とよばれるもの) も畳語の範疇に含めることとする。従って単語の構成という観点からみれば、畳語は次のように二つに分けることができる。

畳語	同語反復語 (人々・泣く泣く)
	部分的反復語 (軽々しい・ほのぼの)

但し、意味を持たない要素が、音声上単に繰り返されている可能性のある音象徴語(例えば「はらはら」「よちよち」など)すなわち擬音語・擬態語はここには含めないことにする。同じ形式が単に繰り返されるだけでは疊語とは認定できないからであり、重複される前の形式が発話の中である意味を担っているということと、重複された後の形式の表す意味が、重複前の意味と関連を持ちつつも意味的に分化していることが条件づけられるからである。

単純語が疊語になることによって、どのような意味・機能と関わるようになるかをみていくと、大きく次の三点にまとめることができる。

- (1) 数
- (2) 情態強調
- (3) アスペクト

本稿では、この中でも特に(1)「数」と疊語との関係に焦点を当てて考察を進めていくことにする。

1. 日本語における数

「数」という文法項目について、日本文法大辞典^(註3)に次のような記述がある。

「事物の数の観念が、それに一定程度対応する文法的事実を生み出していることがあるが、そのような事実を指す。名詞におもに関係し、形容詞・動詞等にそれに関係する形で現われることがある。」この「数」という概念の下に我々は、単数と複数—事物が一つ存在するか、二つ以上存在するか—という対立或いは、単数、双数、複数の対立或いは、単数、双数、三数、複数の対立といった文法的区別を思い浮かべることができる。勿論、これらの現れ方は一定ではなく、言語によって異なっているのは言うまでもない。

しかし、すべての言語が、文法的手段の一つとして、数の区別を持っているわけではないし、そのために複数性を表現できないというわけでもない。事実、日本語には、英語で認められるような文法的範疇としての「数」はないが、それでも二次的な意味での複数を表現する術は存在する。つまり、「子供」→「子供たち」「子供ら」のような接辞の付加によって、或は(「山」→「山々」「木」→「木々」)のような疊語、すなわち形態の反復によって意味的には表現することはできるのである。但し、日本語の複数表現は、その複数性への言及において、文法的な複数表現形式を持つ言語とは異なっている。

以下では、日本語の複数表現の一端を担う疊語の機能を、それ自身のもつ意味から、或は接辞との比較からみていくことにする。

2. 収集された用例

畳語のうち数概念と関わる品詞は名詞・代名詞であるので、ここでは名詞・代名詞が畳語化されたものを抜きだしてみることにする。なお、資料としては新明解国語辞典及び本稿の最後に挙げた参考文献を用いる。

「後々」「家々」「一々」「何時何時」「疣々」「色々」「内々」「各々」「折々」「数々」「方々」「神々」「木々」「口々」「国々」「声々」「戸々」「個々」「語々」「粉々」「これこれ」「先々」「様々」「品々」「縞々」「島々」「下々」「皺々」「順々」「末々」「隅々」「それぞれ」「代々」「度々」「誰々」「段々」「茶々」「蝶々」「月々」「次々」「常々」「(お)手々」「点々」「時々」「共々」「中々」「謎謎」「何々」「並々」「年々」「端々」「花々」「半々」「一つ一つ」「人々」「一人一人」「日々」「節々」「星々」「程々」「前々」「間々」「道々」「峰々」「脈々」「村々」「銘々」「面々」「元々」「山々」「碌々」etc.

これら畳語化されたものの中には、副詞化されたものや、名詞なのか副詞なのか特定することができない例も多くあるが、畳語の持つ意味からみると、場所性、時間性を指示するもの、人間(身体部位を含む)を指示するものが多くみられる。また、「茶々をいれる」のように慣用的に用いられ、「色々」「粉々」のような本来、名詞が持っていた意味のイメージが転じ、一種の比喩的な表現へと変わっているものも見られる。

3. 畳語の複数性指示機能

日本語では名詞の単独形が用いられても畳語形が用いられても、それらは複数個存在するものを指示することができる。これは日本語には文法としての数がないことの一つの裏付けになってはいるが、畳語が「数」の指示に対して何ら関与していないということを意味しているわけではない。このことは、次の二つのことを考察していくとよく分かる。

(1) 「虫」「牛」「魚」「石」「砂」などに畳語形が存在しないように、没個性的にしか意識されないもの、或いは集合的にしか意識されないもの、或いは無限数的であると意識されるものは畳語になりにくい。^(註4)

(2) 畳語は、「※一軒の家々」「※一本の木々」のように単数個あるものを指し示すために用いられない。

畳語は、数概念と結び付きにくいものとは馴染みにくく、単数個を指示するためには用いられないのである。逆に言えば、畳語となった名詞が複数性と何らかの連関性を持っていることの裏付けともなっている。

4. 畳語と複数性

畳語が〈複数性〉に関与する場合、それは不特定多数を表すことになる。このことは、畳語を「二軒」「三本」といった特定の数を指す数詞と共に用いることはできないが、「多くの」「十数人」のように不特定な、或いはやや不特定な数を表すものとは用いることができることから分かる。^(注5)

- (1) 二軒の家
- (2) ※二軒の家々
- (3) 三人の人がやってきた。
- (4) ※三人の人々がやってきた。
- (5) 多くの人々が京都を訪れる。
- (6) 十数人の人々がやってきた。

しかし、不特定といってもこれはあくまでも数に関してであって、指示代名詞とは共起する場合もある。

- (7) あの山々
- (8) あれらの山々

5. 畳語と個別性指示機能

畳語は〈個別性〉を指示する。

- (9) 彼は、月々5万円で暮らしている。
- (10) ヨーロッパの国々では失業率が高い。

(9)の「月々」には、「毎月」「一月当り」といった個別指示の意味が強いが、(10)の「国々」には、「各国」の意味だけではなく、「いくつかの国々」といった不特定多数の意味もある。基本的には同じ特徴を持つ、形状の異なる個数の集まったものを畳語と考えれば、言語使用者の意識が個々の事物に向くか、或いは事物の集合全体に向くかによって意味の理解が異なってくる。また、各畳語の用例を吟味する際、個別指示の意味が強いとか複数性を表しているかということはコンテキストに負うことが多いと考えられる。しかし、「年々」「月々」「日々」などいわゆる単位としての機能を持つ時間性名詞の畳語に個別性指示の機能が強いように、名詞の指し示す事物の意味によって、名詞をグループ化することが可能であるならば、畳語における個別性指示機能と複数性指示機能との関わりをより具体的に提示することができるであろう。

6. 疊語と接辞

文法的数の欠如を補うものとしては、疊語の他に次のような接辞がある。^(註6)

接尾辞—「がた」「たち」「ども」「ら」

接頭辞—「諸」

ここでは、疊語と接尾辞、接頭辞との間に見られる出現環境の違いを中心に見ていくことにする。

6.1. 接尾辞と疊語

接尾辞と疊語は次の点で異なる。

(1) 疊語が±animateに用いることができるのに対して、接尾辞は基本的には+humanのものと共に用いられる。但し、比喩的な意味で次のように言うことはできる。

(11) かわいいお人形さんたちね。。

(12) 小鳥たちが歌っている。

(2) 固有名詞を疊語にすることはできないが、接尾辞「たち」「ら」は固有名詞と共起することができる。

(13) 田中さんたちはどこへ行きましたか。

(14) 知子らはどこへ行った？

(3) 疊語には生産性がないが、接尾辞にはある程度認められる。これは、語彙的に固定したものを疊語と認定していることによる。但し、(1)に挙げたように接尾辞にも共起する名詞類に制限がある。

(4) 疊語は特定の数を表わす数詞と共に用いることはできないが、接尾辞の中には数詞と共起することができるものがある。

(15) ※ここに3人の人々がいる。

(16) 彼には3人の息子たちがいる。

(17) 3人のがきどもがやって来た。

6.2. 接頭辞と疊語

接頭辞「諸」の付された名詞句には次のようなものがある。

「諸君」「諸国」「諸種」「諸問題」「諸人」「諸子」「諸侯」「諸所」「諸般」「諸島」「諸公」「諸方」「諸事」etc.

上記以外にも用例はあるであろうが、生産性という点で、疊語ほどではないにしろかなり乏しい。また、-animateにも用いることができるという点が、「諸」と疊語の共通点である。

両者の間の違いについては、國廣(1980)^(註7)に述べられているように次の2点にまとめられる。

(1) 接頭辞「諸」が付された名詞句は特定、不特定を問わず数量詞と共に用いることができない。

(18) ※多くの諸問題

(19) ※ 3つの諸問題

「問題」が1つしかない場合に「諸問題」とは決して言わないことから分かるように、「諸」は明らかに複数性に関与しているが、特定・不特定を問わず数量詞と共起しないことは、これが「集合体」指示機能を強く持っているためであると思われる。

<個別性>を含意する畳語に対して、「諸」は<集合性>を含意していると言える。

(2) 「諸」が漢語としか結びつかないのに対して、畳語が複数性に関与する場合、語幹はほとんどの場合和語に限られる。

(20) a. 言語教育の諸問題を論じる。

b. ※言語教育の問題問題を論じる。

(21) a. ※森の諸木

b. 森の木木

7. まとめ

名詞の畳語形が複数性を含意する場合、それは大きく分けて [1] 不特定多数指示機能 [2] 個別性指示機能と関わることになる。この二つの機能は独立したものというよりは相補うものである。片方の意味が強くなれば、もう一方の意味が表向き弱くなるというように理解されるものである。

また、数量詞との共起関係をみると、特定の数を示す数詞とは共起しないが不特定の数を示す数量詞とは共起しうる畳語は、特定・不特定をを問わず数量詞と共起しうる接尾辞と数量詞とは共起しない接頭辞「諸」の中間に位置していると言える。

注

(1) Moravcsik (1978) p.299

(2) 玉村 (1988) p.24 なお同書でも触れられているように、用語上「合成語」と「複合語」が逆になる場合もある。

(3) 日本文法大辞典 p.346

(4) 玉村 (1986) pp.233-236を参照のこと

(5) 國廣 (1980) pp.13-14を参照のこと

(6) 同上 pp.14-15を参照のこと

(7) 同上 pp.14-15を参照のこと 例文(18)(19)(20)(21)は同書より引用。

参考文献

- 玉村文郎 「古代における和語名詞の畳語について」『論集日本語研究(二) 歴史編』明治書院、1986、pp.220-238
- 玉村文郎 「複合語の意味」『日本語学』第7巻5号、1988、pp.23-32
- 原野亮子 「畳語について」『九州大学留学生教育センター紀要』第1号、1989、pp.91-103
- 矢島文夫 「言語類型学の一指標としての畳語」『言語研究』第84号、1983、日本言語学会、pp.218-220
- Edith A. Moravcsik, "Reduplicative Constructions", Universals of Human Language Vol.3, Stanford University Press, 1978, pp.298-334
- 安藤貞雄 『英語の論理・日本語の論理』、大修館書店、1986
- 泉井久之助 『印欧語における数の現象』、大修館書店、1978
- 國廣哲彌 『日英語比較講座』第2巻文法、大修館書店、1980
- 橋本萬太郎 『現代博言学』、大修館書店、1981
- 三浦つとむ 『日本語の文法』、勁草書房、1975
- 森田良行 『基礎日本語2』、角川書店、1980
- 森田良行 『日本語学と日本語教育』、凡人社、1990

辞書類

- 松村 明 『日本文法大辞典』、明治書院、1981
- 金田一京助、柴田武、山田明雄、山田忠雄
『新明解国語辞典』第4版、三省堂、1989